

CLOSE-UP
INTERVIEW

公益財団法人世界自然保護基金ジャパン事務局長

東梅 貞義 さんに聞く

「聞き手」川島 葵さん フリーアナウンサー

異なる立場の人々と
対話を繰り返しながら
環境保全に取り組む



とうばい・さだよし

1965年生まれ、岩手県出身。国際基督教大学教養学部理学科に進学して生物学を専攻。1990年に卒業後、イギリス・エディンバラ大学大学院に留学して修士(Master of Science)を取得。1992年にWWFジャパンに入局。日本国内の重要湿地の保全活動などに携わり、自然保護室長、シニアダイレクターを歴任。2020年よりWWFジャパン事務局長を務める。

自然に囲まれて育ち 獣医師を志す

川島 本日は人類が自然と調和して生きられる未来を指し、約100カ国で活動を行っている、世界的な環境保全団体WWFの日本事務局「公益財団法人世界自然保護基金ジャパン(WWFジャパン)」に伺いました。お話を聞かせていただくのは、WWFジャパン事務局長を務める東梅貞義さんです。岩手県花巻市の生まれですが、どのような少年時代を過ごされたのか教えてくださいませんか。

東梅 実家や通学した学校の周囲は山、川、田んぼばかりで、自分の周りがある楽しいことは自然の中にある、という環境でした。

川島 自然豊かな場所で成長なされたんですね。

東梅 父がきこりを趣味にしている、毎週日曜日は家族で山に行くのが習慣だったんです。私も1歳になるかならないかの頃から山に連れて行かれていました。山では杉や松の苗木を植えたり、木を切って家の風呂を沸かすための薪にしたり。小学1年生になった頃には当たり前のようにそうした作業をしながら、自然の中で遊んでいました。

川島 自然と関わる仕事に就いた背景には、やはり幼少期のご経験の影響があるのでしょうか。

東梅 物心つく前から自然と親しんでいたということもありますが、子どもの頃に読んだ本の影響も大きいですね。中でも『シートン動物記』や『ファーブル昆虫記』、動物文学の第一人者である戸川幸夫さんの全集など、動物にまつわる本が大好きでした。

川島 その後、獣医師を志すようになったと伺っていますが、何かきっかけがあったのでしょうか。

東梅 「動物に興味があるなら獣医という仕事がある」と親から聞かされたのだと思います。小学生の頃にはすでに、将来の夢として「獣医になりたい」と学級文集に書いていました。その後、日本の女性獣医師のパイオニアでもある増井光子さんの本を読んで憧れを抱きました。

川島 しかし、夢をかなえるのは簡単ではなかったと。

東梅 獣医学科のある大学をいろいろ受けましたが、志望校は不合格でした。ただ、今振り返ると、どうしても獣医になりたいというよりも、動物や自然が好きだったんだと思います。獣医になりたいんだと、ずっと思い込んでいたのかもしれません。

出会いをきっかけにICUへ進学

川島 1年間予備校に通われましたが、その間に心境の変化などはありましたか。

東梅 2度目の受験の時もまだ獣医になりたいという思いはありましたが、通っていた予備校で、アメリカ人の英語の先生と出会ったんです。拙いながらもその先生と英語で話していると、とても楽しかった。英語が話せれば世界中のいろいろな人と話せるのだと。英語を学ぶよりも英語で話す面白さに気付き、視野が広がったことで「動物に関わるなら獣医でなくてもいいのかもしれない」「動物を通して世界の人とつながる方が面白いかもしれない」と考えるようになりました。国際基督教大学（ICU）の合格通知をもらった時には、これが本当にやりたいことなのだと迷わず進学を決めました。

川島 ICU進学の決め手は何だったのでしょうか。

東梅 生物学が学べる私立大学はとて少ない上に、英語を存分に学べる大学となると非常に限られています。高校時代は大学の名前もよくは知らなかったのですが、ICUに進めば、何か面白いことができるんじゃないかな

と思いました。英語を学ぶのではなく、英語で学ぶことが中心でしたし、他専攻の講義を受講することも推奨されていました。後から親には、子どもの頃からの夢の獣医ではなく、違う道でいいのかと心配したと言われましたが。

川島 理学科生物学専攻では、具体的にはどのようなことを学ばれたのですか。

東梅 学生時代に他大学の方に会うと、生物を専攻しています、生物研究室に所属しています、といった自己紹介がありました。私は生物が好きで生物について学んでいましたが、生物だけを専門にしていると意識したことがなかったんです。生物をテーマに卒業論文を書きましたが、自分の興味のあることを学んでいるという思いで、専門家になるという考えはありませんでした。WWFジャパンにもよく若い方から問い合わせがあるのですが、多くの方から「何を勉強すればWWFに入れますか」という質問をされます。確かにWWFでは、実際に野生動物の生息地域を訪ねて保護に取り組むこともあります。環境



川島 葵さん

に影響を与えている企業と交渉したり、国際会議で条約交渉をしたりする仕事もかなりのウエートを占めます。そのため、動物に関する知識だけではなく、国際関係やビジネスについての知識も必要となります。何か特定の分野だけを専門的に学ぶのではなく、その時々で環境保全に必要なことを学び続けることが重要だと思います。学生時代に専門分野だけに限定せず、興味のあることを学ぼうとした姿勢は、現在の仕事に対するスタンスにつながっているかもしれません。

また、環境問題は多くの分野やセクターの人が関連しているので、結果的には自分が知らないことも新たに学んでいくこととなります。学ぶ前に多くの人と会い、お話をたくさん聞かせてもらう、インタビューをしながら一緒に考えて学んでいくという仕事だと思います。

学生時代に環境問題に取り組む

川島 学生時代に早くも環境問題に対してアクションを起こされたと聞いています。

東梅 興味があつて履修していた教育学の授業を担当していたのが、ベンジャミン・デューク先生でした。当時、ICUの近くの野川公園にゴミ焼却場を移転する計画が持ち上がった

たのです。公園の中心部に移転するのですから、環境や景観を損なうのは明らかです。しかもそこは、元々、ICUのキャンパスで、東京都へ売却後に公園として使われていた場所でした。そうした経緯もあり、コミュニティの関係者としてICUも声を上げるべきなのではないかとデューク先生は考えて、移転反対の署名活動を始めたのです。私もそれに共感して一緒に活動に取り組みました。その成果もあつて、最終的に移転案は白紙になり、ゴミ問題自体に対する地域の人々の関心も高まりました。

川島 当時の経験は現在のお仕事にも役立っていますか。

東梅 WWFジャパンに入局して最初のミッションが、渡り鳥とその飛来地である湿地を守ることでした。湿地がなくなる主な原因の一つが、ゴミの埋め立て場として使われることなのです。それに対して、世界中でいろいろな立場の人たちがいろいろな活動をして湿地の保全に取り組んでいる。私自身、学生時代にその一人としてゴミ処理の問題に取り組んだ経験は、そうした状況を理解するのに役立ちました。



東梅 貞義さん

川島 特に印象に残っている学生時代の学びや、仕事に生かされていると感じる学びがあれば教えてください。

東梅 やはり実験を通して得たものは大きいですね。シヨウジヨウバエを使った遺伝の実験を行ったのですが、正しい手順を踏んだつもりでも教科書に書いてある通りの結果が出ないことがある。そこで試行錯誤して実験をやり直すと、理論通りの結果が得られる。すでに結果の分かっている実験ですが、やはり自分でやってみると難しいし、自分でデータ収集からやってみないとデータが示す意味が分からないことがある。それを経験できたのは大きかったですね。

実験のレポートもたくさん書きました。イントロダクション(序論)、メソドロジー(方法)、リザルツ(結果)、ディスカッション(考察)という形式で論文を書くのですが、それを繰り返したおかげで、仕事をする上で、何を明らかにして、結果から何を読み取るべきなのかをクリアに考えることができるようになりました。大学では物事や社会問題の考え方の訓練を受けたような印象です。

川島 大学卒業後、イギリスのエディンバラ大学大学院に留学されましたが、その理由を教えてください。

東梅 それも大学時代の一つの出会いがきっかけでした。

もっと動物と社会を結び付けた学びをしてみたいと考えていたので、雑誌で目にしたWWFジャパン主催の熱帯林保全セミナーに参加してみました。セミナー終了後に、講演していたイギリスのWWFのスタッフの方に「イギリスで環境保全について学ぶならどの大学がいいですか」と聞いてみると、エディンバラ大学を勧められたのです。

川島 留学先ではどのようなことを学ばれたのでしょうか。

東梅 自分が知りたいと思っていたこと、興味がなかったけど役立ちそうなことを幅広く学べたという印象です。例えば、私は数学が苦手だったのでちょっと敬遠していましたが、農業経済学の授業を苦労しながらも学んでみると大きな収穫がありました。農業において10年後に期待される利益などを数式を使って導き出すのですが、そうした考え方がいろいろなプロジェクトに応用できることが分かりました。それから、苦手なことでも必要なことは取りあえず学んでみる、人に聞いてみる、という姿勢が身に付きました。

人間の経済活動により 生物多様性が69%減少

川島 その後、日本に戻り、1992年にWWFジャパン

に入局されましたが、その経緯を教えてください。

東梅 大学院で学んでみて、自分が研究者になりたいわけではないことがはつきりしました。研究を続けるよりも、生の社会問題に生の現場で関わりたいと思うようになったのです。それでWWFジャパンへの入局を決めました。

川島 WWFジャパンでは、日中韓の国際湿地地保全プロジェクトのリーダーを務めるなど、幅広く活動されてきましたが、これまでのお仕事を通して心掛けてきたことはありませんか。

東梅 自然環境を守るためには、企業の経済活動も考慮に入れなければなりません。木材や天然ゴムなどを採取することが自然環境の破壊につながっていますが、企業側は利益を出したい一方で社会が必要とする物資を供給する責任も負っています。環境を守ろうとすれば、そうした立場の異なる人たちとも話し合いながら解決策を探らなければなりません。そうすれば、必ず何かつながり合えることが出てきます。そのためにも、立場が違う人に積極的に会いに行つて話を聞くことを大切にしています。

川島 WWFでは、世界の生物多様性の劣化を「反転」させる「2030年生物多様性回復目標」、気候変動の脅威

を食い止める「2050年脱炭素社会実現目標」という2つの大きな目標を掲げています。困難もあるかと思いますが、目標を達成するためには何が必要なのでしょうか。

東梅 過去半世紀の間に、世界の野生動物の数はどの程度減っていると思いますか。

川島 45%ほどでしょうか。

東梅 実は1970年から2018年までの間に69%も減少しているのです。その大きな要因は、森林など野生の生き物が住める場所がなくなっていることにあります。実は、森林を減らしている世界最大の要因となっているのが牛肉です。牛を育てるのには広大な放牧地が必要なのですが、そのために多くの森を切り開いているのです。そこでは、牛が食べる牧草は育っていますが、他の動物が必要とする葉や木の実がなくなってしまう。本来、いろいろな動物がうまくつながって生態系をつくっていた自然環境が、牛肉を生産するためだけの畑になってしまっている。日本はオーストラリアの最大の牛肉輸出先ですが、オーストラリアの森林を減らしている原因の一つがその牛肉なのです。

川島 そんなに野生動物が減少しているとは、衝撃的です。

東梅 また、森林を減らしている三大要因のうち一つに

大豆があります。ブラジルやボリビアなど南米の地域で、元々、草原や灌木地かんぼくだった場所が、大豆だけが育つ畑に人の手で変えられてしまっています。大豆は人間の食料としても消費されますが、実は世界で作っている大豆の75%が家畜の飼料として使われています。ですから、個々人が大豆食品を食べるのをやめても環境が守られるわけではない。問題の本質は別のところにあるのです。

川島 そうした問題を解決するためにどのようなアプローチをとられるのでしょうか。

東梅 企業を相手に動物が減っている話だけを延々としても、「あなたは動物が好きなんです」という話で終わってしまいます。かといって「あなたたちは悪いことをしている」と言っても何も始まらない。ですから、例えば食品関係の企業に対して、「環境に負荷を与えている牛肉など、森林減少に関わる原材料をどれくらい輸入しているかご存知ですか?」というふうには、相手の課題認識を探ることから対話を始めます。環境問題に関連している企業は無数にバリューチェーンを通じてつながっており、経営に関わっている役員や出資している投資家も数多くいます。われわれWWFはそうした人たち全てに会いに行くのです。今もスタッフ

全員でその活動を続けています。今のまま企業や社会の仕組みが変わらなければ、どの国や地域の環境と社会にどのような影響が出てくるのか、企業の収益がどう左右されるのか、そうした情報を共有し、企業と一緒に考え始める。そして、いつ、何を、どの程度やるのか具体的に組み立てていく。現在、そうした取り組みに最も力を入れています。

人々の意識によって 世の中は変わっていく

川島 専門性を磨くことだけでなく、広い視点を持って対話をする力が必要だということがよく分かります。他にも環境保全に携わりたいと考えている若者が身に付けるべきこと、学ぶべきことがあれば教えてください。

東梅 私がICUで環境保全の授業を持つようになって10年以上が経ちますが、当初は環境問題の解決策を学生に教えたいと考えていました。しかし、教えることはできるものの、学生が学んでいるかどうかは別の話だと気付きました。知識を与えるだけでなく、学生が本当に学びたい、解決したいと思うことを自分の力で探し当てられるようにしなければならなかったのです。そこで、授業ではICUキャンパ

ス内の環境問題について学生がグループで調査するという課題を出すようにしました。学生たちはその問題のキャンパスの関係者と、その人とは違う考えを持っているやはりキャンパスの人に直接会って話を聞くことが必須です。すると学生は、立場の異なる2者に対話を促したり、対話の場を持って問題を解決しようという提案書を作成してきます。誰かに解決策を教えられるのではなく、当事者のところに足を運んで話を聞き、自分たちで解決策を考える。その方が自分が学びたいことに近づけるのではないかと思います。環境保全に取り組む組織や企業でも、そうした異なる立場の相手を理解し、対話ができる人材が求められています。

川島 お話を聞いてみると、一個人として環境保全に貢献できることはないかと考えてしまいます。私たちにも何かできることはあるのでしょうか。

東梅 まずできることは、環境に対して負荷をかけないものを選ぶということですね。家具などの木材製品やノートなどの紙製品を見ると、FSCマークというものが付けられた製品があります。このマークは自然環境に負荷をかけずしっかり管理された森林で採られた原料を使っていることを認証するものです。そうした製品があることを知る

人、選ぶ人が増えれば世の中は変わっていくと思います。

川島 ちゃんと環境を意識して消費する人が増えることが大切なのですね。その点、日本人の環境に対する意識はどの程度養われているのでしょうか。

東梅 野生動物の数は世界全体で見ると69%減少していますが、実は日本を含めた先進国では、少しずつ回復傾向にあります。日本人が身の回りで生き物が減っている気がしないのも当然のことかもしれません。しかし、その自然の豊かさが別の国の自然を犠牲にすることで支えられているのが現実です。自分の豊かで便利な生活が、どの国の自然と人とながつながって、どう成り立っているのかということを考える人がもっと増えてほしいと願っています。

川島 お話を伺って、私も環境に対する理解を深めて、できることから始めようと思いました。本日は貴重なお話をありがとうございました。

